

令和元年度 星槎大学・大学院 学位記授与式

学長告辞

本日ここに、令和元年度星槎大学・大学院 学位記授与式を挙げるに当たり、学位取得者の皆様並びにご家族及びご関係者の皆様方に、星槎大学を代表して、心からお慶びを申し上げます。

令和という年号に入って初めての学位記授与式は、新型コロナウイルスの世界的感染という大変な世界情勢の中で迎えました。そのために、皆様がZOOMを通して授与式に参加される形になったのは誠に残念ですが、北は北海道から南は沖縄まで、全国各地で学ばれた方にご参加いただいたことは、本学の特色のあらわれかと思っております。

本学では、通信制大学として、このZOOMを日頃からスクーリングや教員免許状更新講習等に活用しておりますが、今般、学位記授与式においても活用することといたしました。

まず、本年度、星槎大学での学修を修了し、めでたく学位を取得された皆様は、共生科学部70名、大学院教育学研究科教育学専攻修士課程27名、教育実践研究科専門職学位課程15名、合わせて112名でございます。このうち、昨年の9月末に修了された方が15名、3月に修了された方が97名です。その構成は、男性が39名、女性が73名、平均年齢は学部が35.4歳、教育学研究科が47.2歳、教育実践研究科が45.2歳です。また住まいは30以上の都道府県にまたがっているほか、大学院修了者の中には、ロシアのウラジオストク、アメリカのヒューストン在住の方もいらっしゃいます。これは、本年度も地域や年齢など幅広い方々が本学で学修されたことの、証左であると思っております。

さて、冒頭で述べた新型コロナウイルスの感染について、昨年の終わりにはまだ日本では報道されておらず、今年の1月半ばに初めて中国武漢で猛威をふるっているウイルスに日本人感染者が出たとの報道がなされました。そして、日本、韓国、イラン、オーストラリアなど少数の国だけでの流行かと思いきや、イタリアをはじめとするヨーロッパやアメリカでも感染者がまたたく間に増大し、数日前にWHO(世界保健機構)もパンデミック宣言を出す事態に至りました。今日の時点で感染は123の諸国に及び、公式な見解での感染者数は13万人を超え、収束の見通しは、いまだ立っておりません。

日本では、3月2日からほとんどの小中高の学校が休校状態になりました。そして、コロナウィルスの影響は、観光業界や飲食業界をはじめとする経済界、春の選抜高校野球が中止になるなどスポーツ界に波及し、今年7月24日から開催予定の東京オリンピック・パラリンピックが無事開催できるのかどうかも、不透明な状態です。これはまさに歴史的イベントと言っても過言ではなく、皆さんも、これからの日本や世界がどのような道をたどるのか、大変気になっておられることでしょう。

しかし、こういう状況だからこそ、星槎で学んだ皆さんの知恵や見識がそれぞれの現場で、試され、活かされるべきだと、私は思います。星槎が掲げる共生教育は、他者の心に可能な限り寄り添い、自分に何かできるか考え、行動する力を身に付けることを目的としています。そして昨年度の井上学長の告辞でのお言葉を借りるならば、「社会に必要とされることを創造し、常に新たな道を切り開き、それを成し遂げる」という星槎の建学の精神は、日々の生活の中であなたの心に起きる揺らぎ、戸惑い、違和感、人との関わりの中で生まれてくる想いを大切にすること、を意味します。また、そこから生まれる発見や感情を見過ごさずに受け止め、その困難や問題を仲間と一緒に理解し、共有し、その解決に向けてのぶつかり合いや努力を通して共に成長すること、と読み替えることもできます。

ここで僭越ながら、私が15年以上も前から、若者向けのジュニア新書や選書などで唱え、星槎の学部や大学院の授業でも強調した「個人と社会のかかわり方」を、援用させてください。私は以前から、個人を犠牲にする「滅私奉公（めっしほうこう）」ではなく、できるだけ個人一人一人を活かしながら、公共という名の人々のつながりを強め、笑顔を伴う「活私開公（かっしかいこう）」というライフスタイルと、そのために、私利私欲をできるだけ除いて人々をサポートする「無私開公（むしかいこう）」というライフスタイルの組み合わせや協働で成り立つ社会を、理想的な社会の姿だと考えております。それは、公共心を欠いた利己主義と、個性を欠いた集団主義を超える「新しいコミュニティー主義」と言ってよいでしょう。

振り返れば、今から7年半ほど前に、私のこの考えとほとんど合致する理念を、星槎の「人を認め、排除せず、仲間を作る」という理念の中に見出した時は、本当に驚きでしたし、星槎の創設者の宮澤保夫会長と初めてお会いし、面談した際に受けた印象は、実に強烈でした。それまでの道のりは大きく違っているとはいえ、互いに通じ、共有できる大きな思想や考え方を感じたからです。そして、私がそれまで狭いアカデミックな場で考えてきたことが生（なま）の

形で活かせる場を発見したという思いでいっぱいになりました。しかし、教員としての私がどこまで、皆さんをはじめ学生の方々に貢献できているかについては、内心忸怩たるものがあります。でも、私は、少なくとも授業を通して皆さんから多くのことを学びました。その意味で、私は皆さんに感謝しなければなりません。

インターネットで自由に事柄を調べられる今日、「教員は学生に教える存在」だという解釈は、もはや時代遅れになりました。この4月から各学校で求められる「主体的、対話的で、深い学び」にも対応して、「教員は学び続ける存在であり、生徒や学生からも学ぶ存在」だという理解が、広く社会に浸透しなければならない時代に入ったと私は考えております。私も学び続けますので、皆さんも星槎で学んだことを社会の中で発展させる形で、学び続けてください。

学位記授与式は、アメリカの諸大学やイギリスのケンブリッジ大学、アイルランドのダブリン大学などでは、開始を意味する commencement と呼ばれています。このような観点から言えば、今日は、星槎で学び身につけたことが、皆さんそれぞれの現場で問われることが始まる日なのです。その思いを胸に刻んで、互いに頑張りましょう。

本日は誠におめでとうございます。

令和2年3月14日
星槎大学
学長 山脇直司